

図349 SR16 出土遺物 15

上層

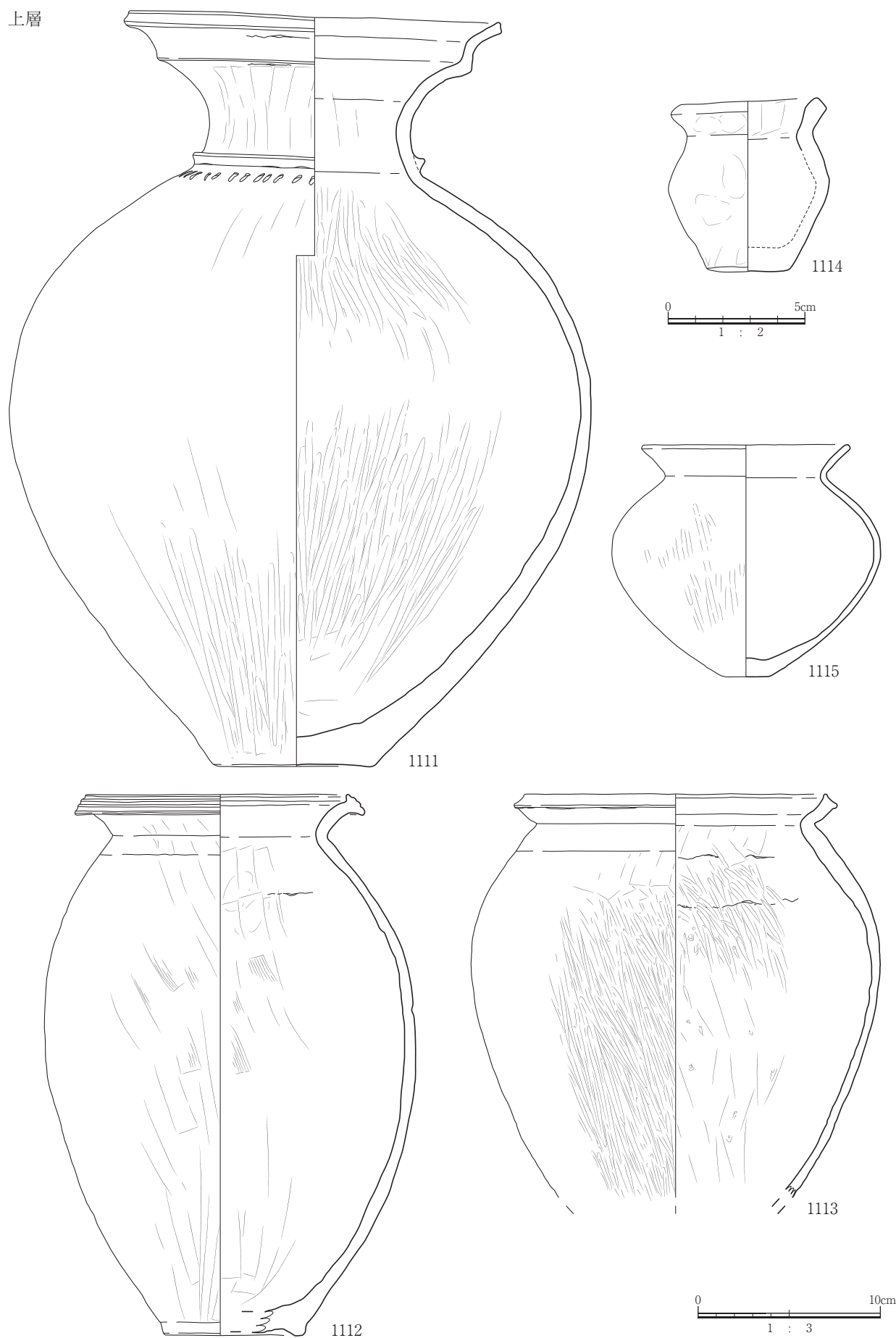


図350 SR16 出土遺物 16



上層

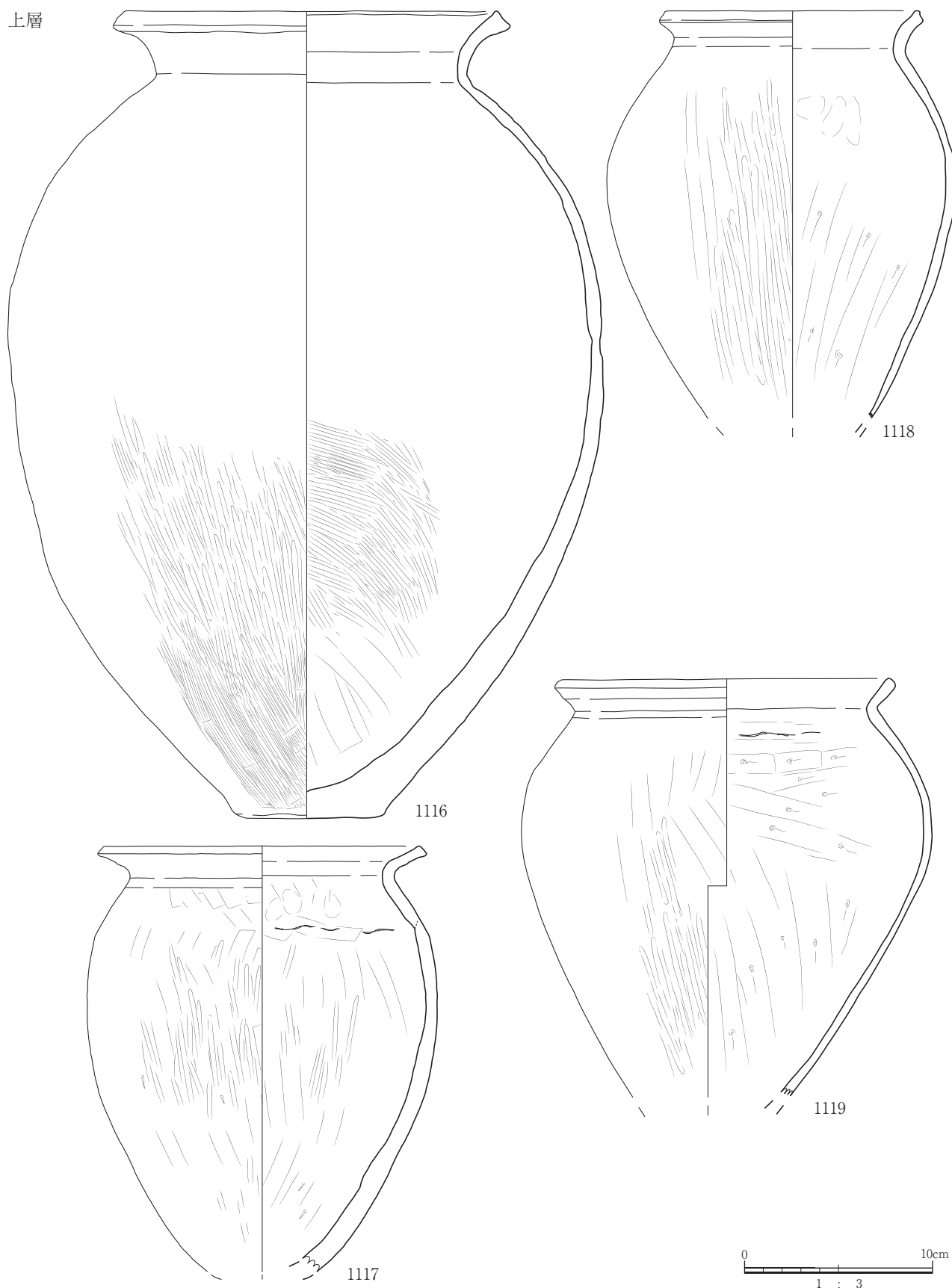


図351 SR16 出土遺物 17

上層

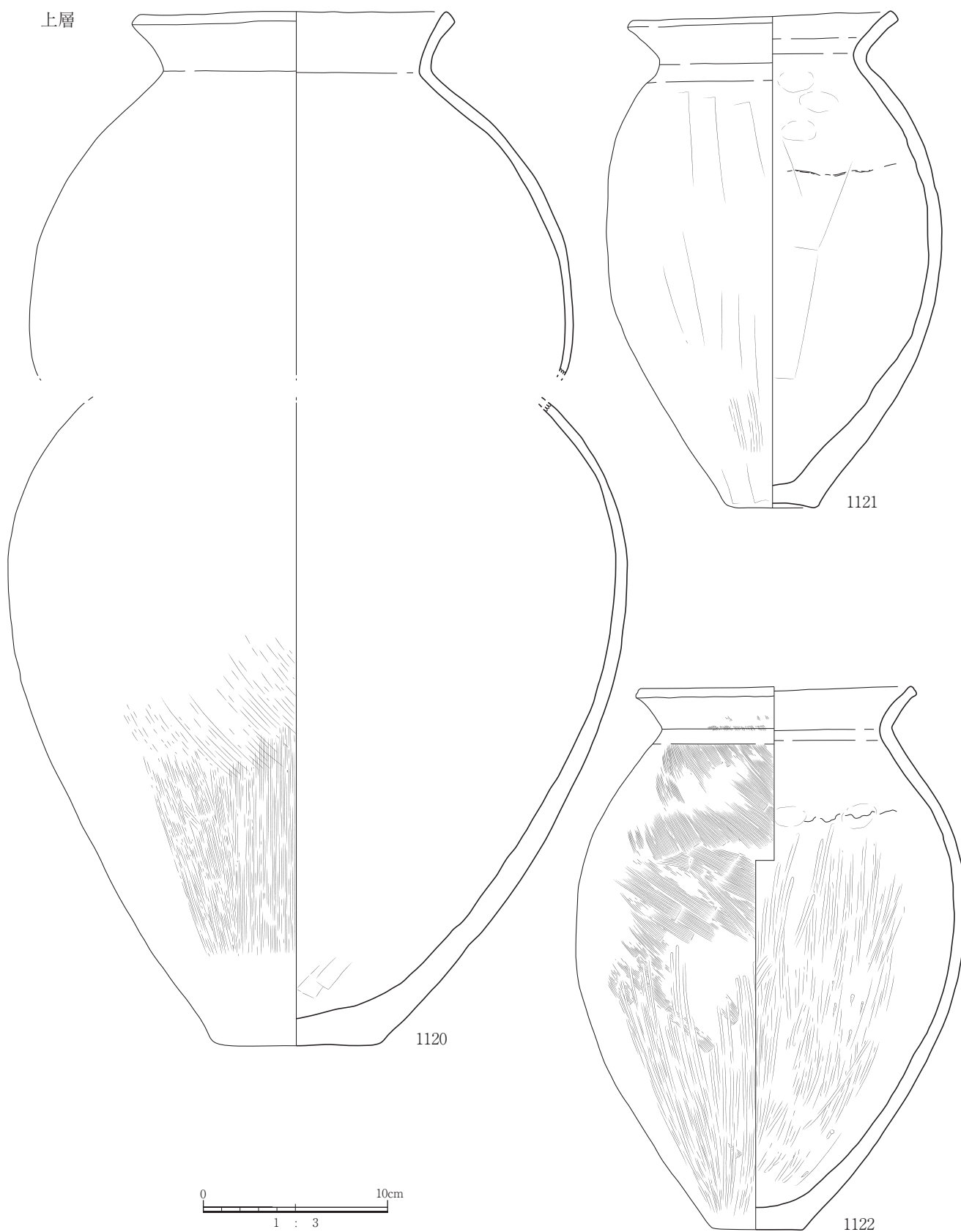


図352 SR16 出土遺物 18

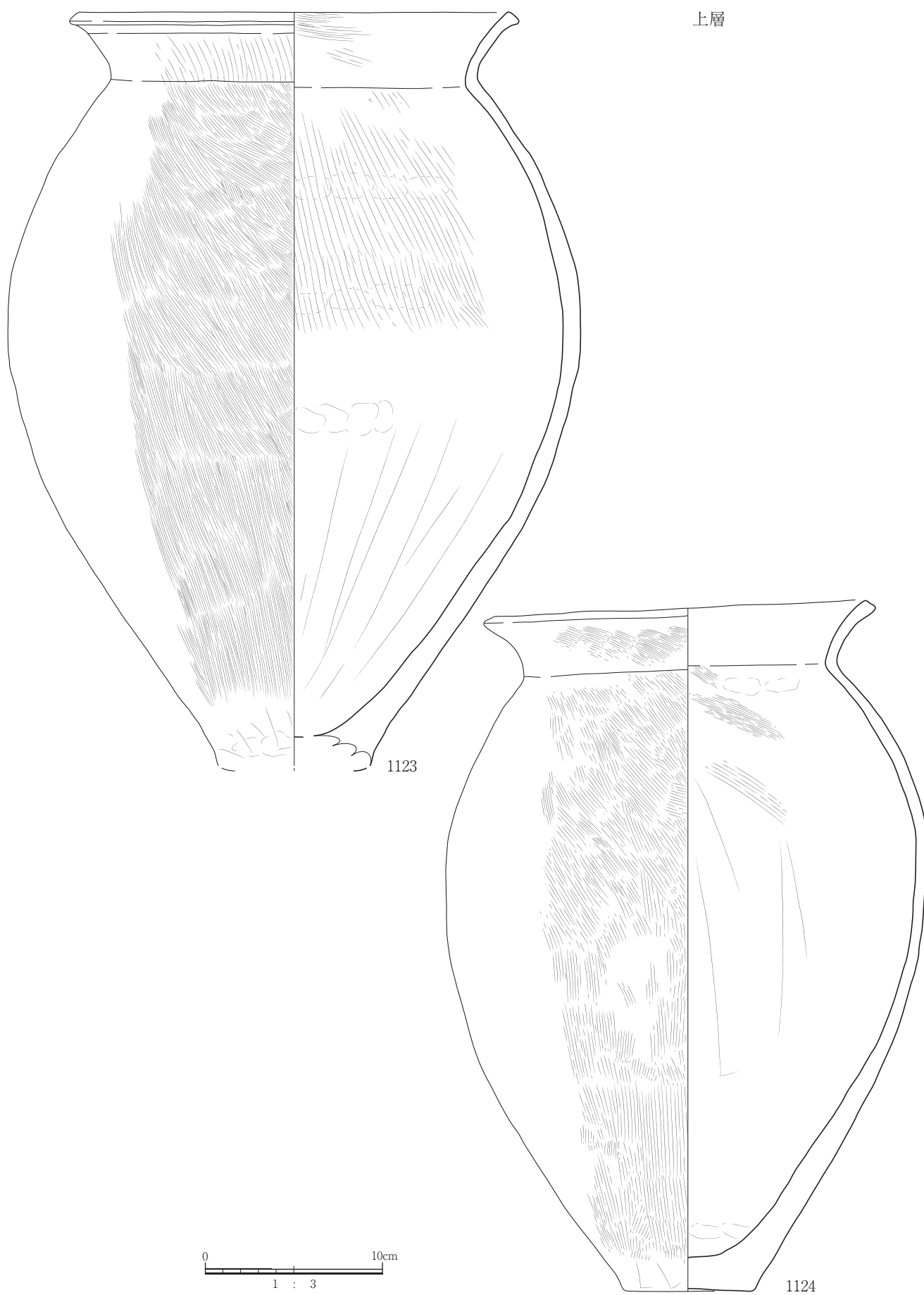


図353 SR16 出土遺物 19

上層

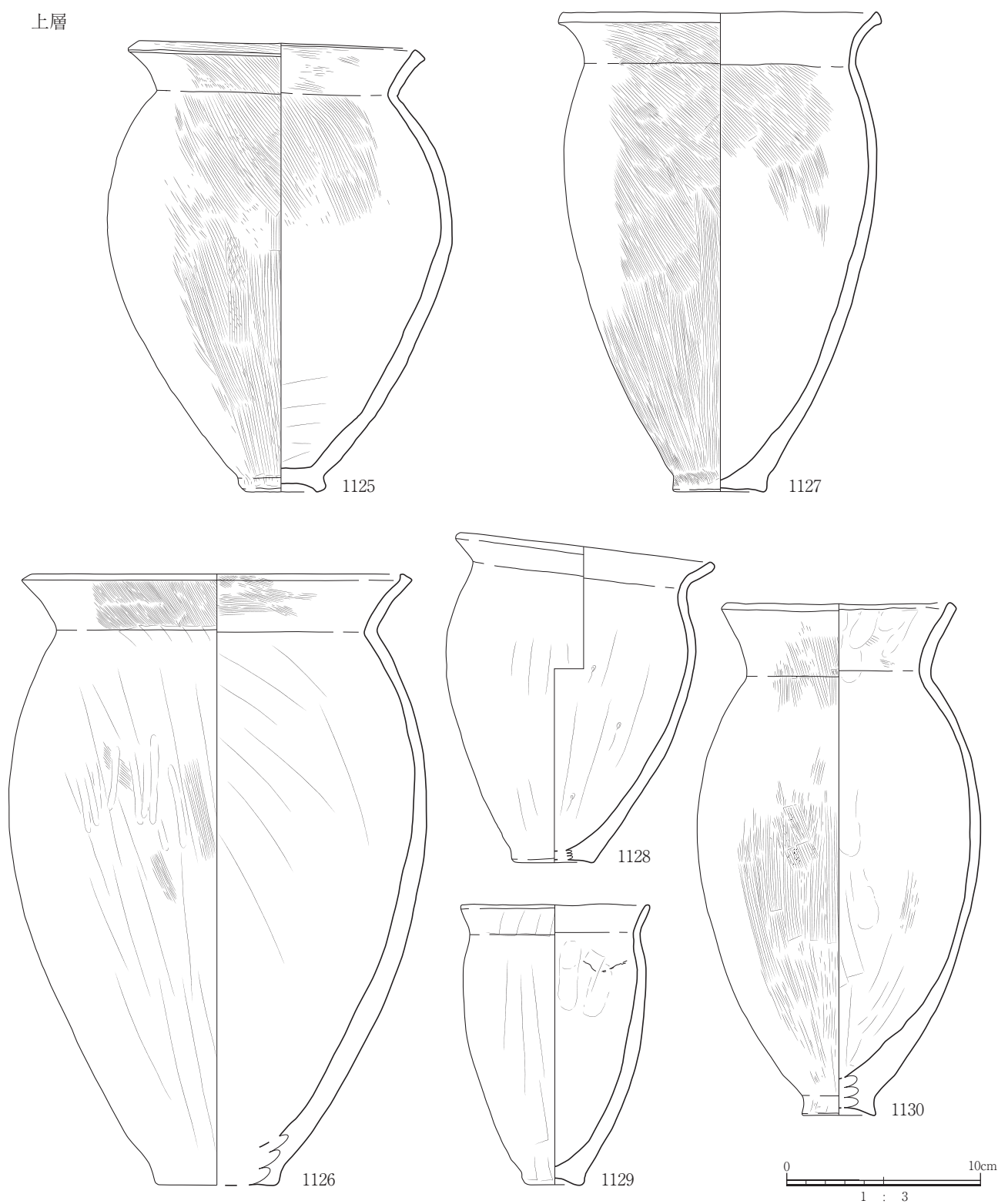


図354 SR16 出土遺物 20

上層

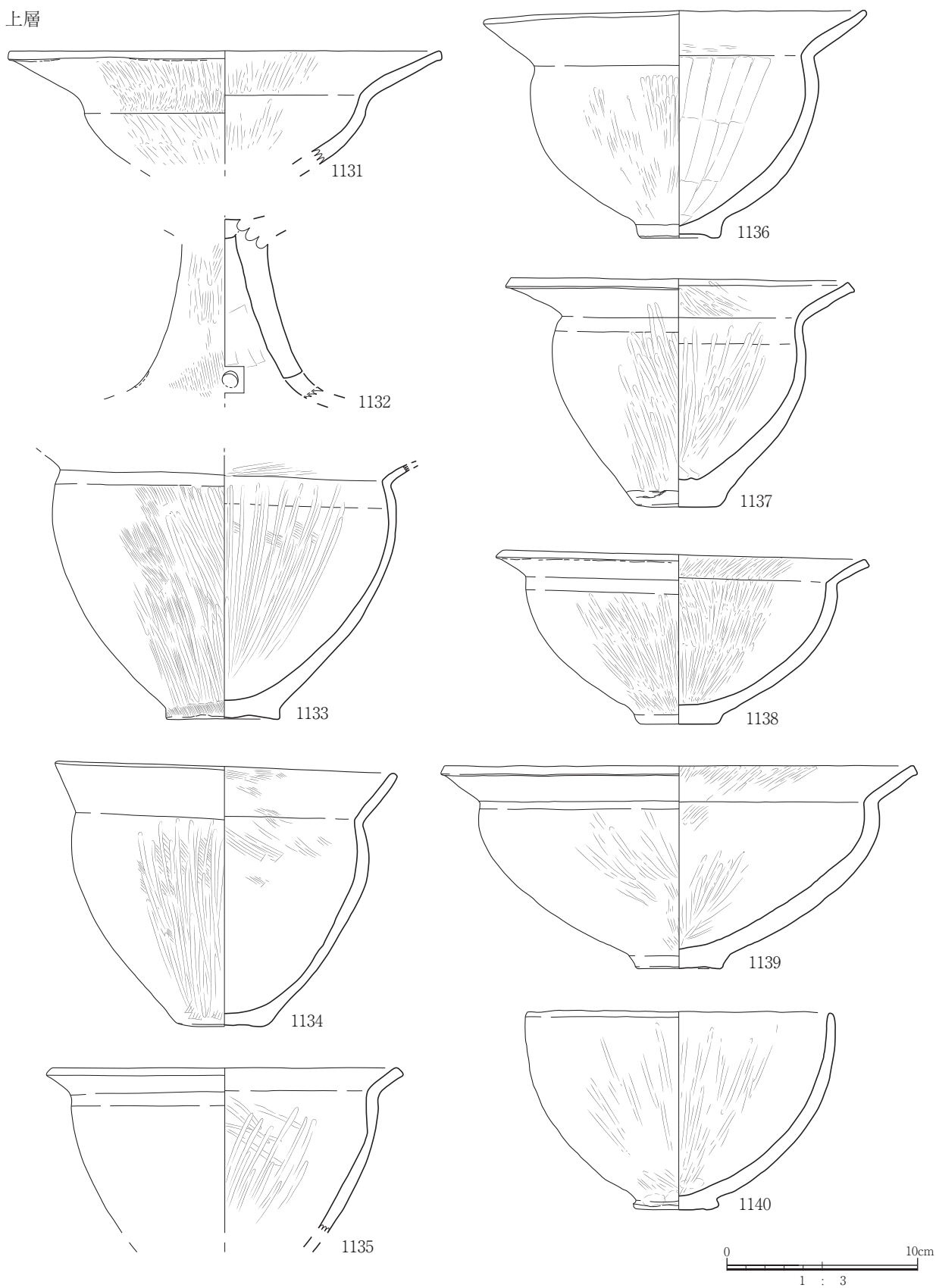


図355 SR16 出土遺物 21

あまり外反しない。整形はやや稚拙である。1163は胴部、頸部の外面に丁寧なハケの後にまばらなミガキが施されている。胴部上位には絵画が描かれている。頸部近くからはほぼ平行する2本の線が右に屈曲し、さらに右下に向かって弧を描きながら伸びる。2本の線の屈曲部付近からは下方に複数の線が伸びる。これらの線のなかには、意図的に描かれたものではない可能性のある線もあるが、実測図では積極的に絵画として表現している。また、いわゆる籠目土器で胴部の一部に網の痕跡が残る。1164は比較的大型の広口壺で、直立する口縁部外面と頸胴部境の突帯にハケ原体による施文がなされている。破片だが1165も1164と近い形状が推測される。口縁部と突帯の施文もハケ原体による。1166は直立する口縁部外面に数条の稚拙な沈線文がめぐらされている。凹線文の模倣の可能性もある。1167～1172は複合口縁壺である。直口壺1173の胴部最大径はやや

上層

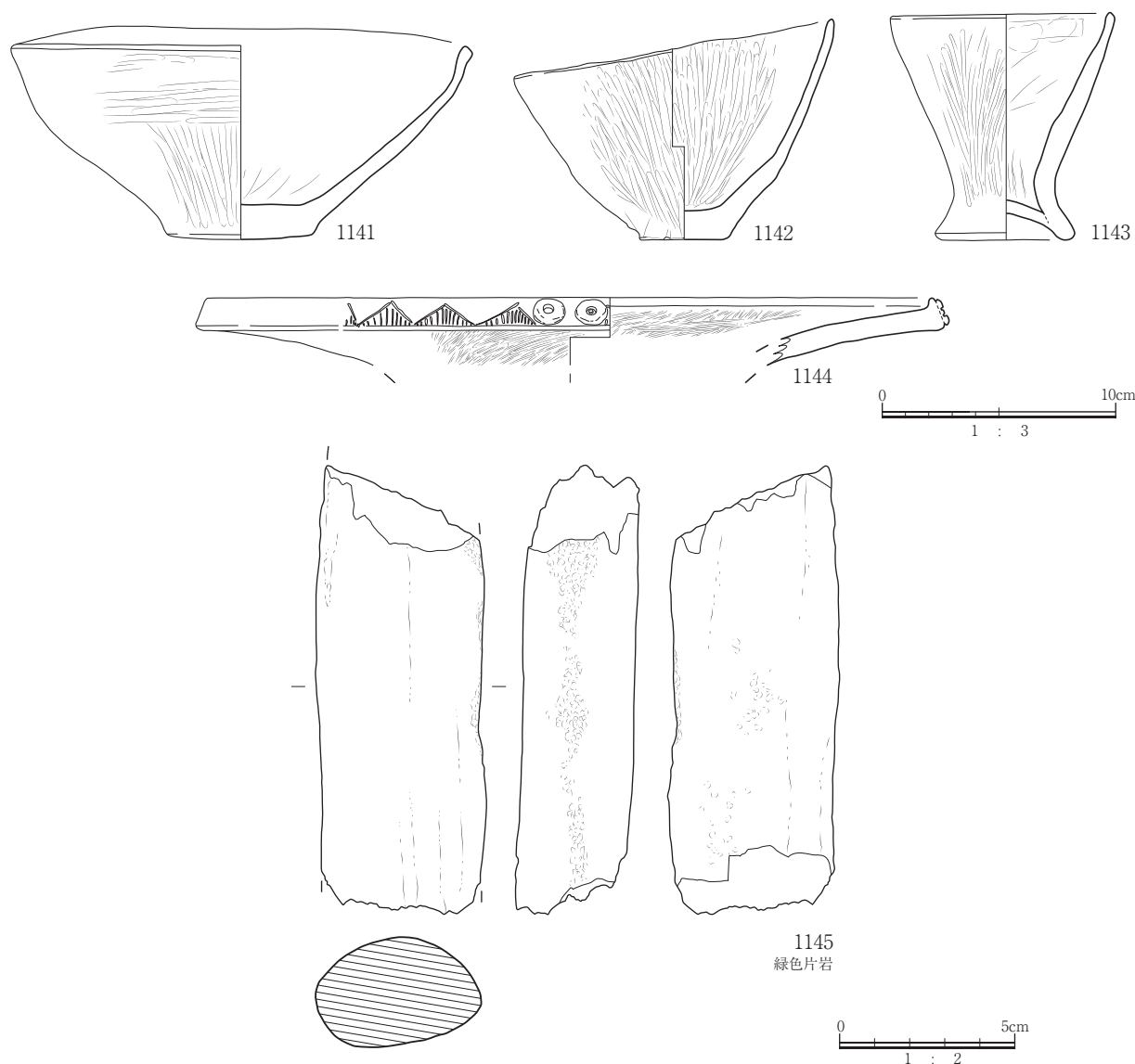


図356 SR16 出土遺物 22



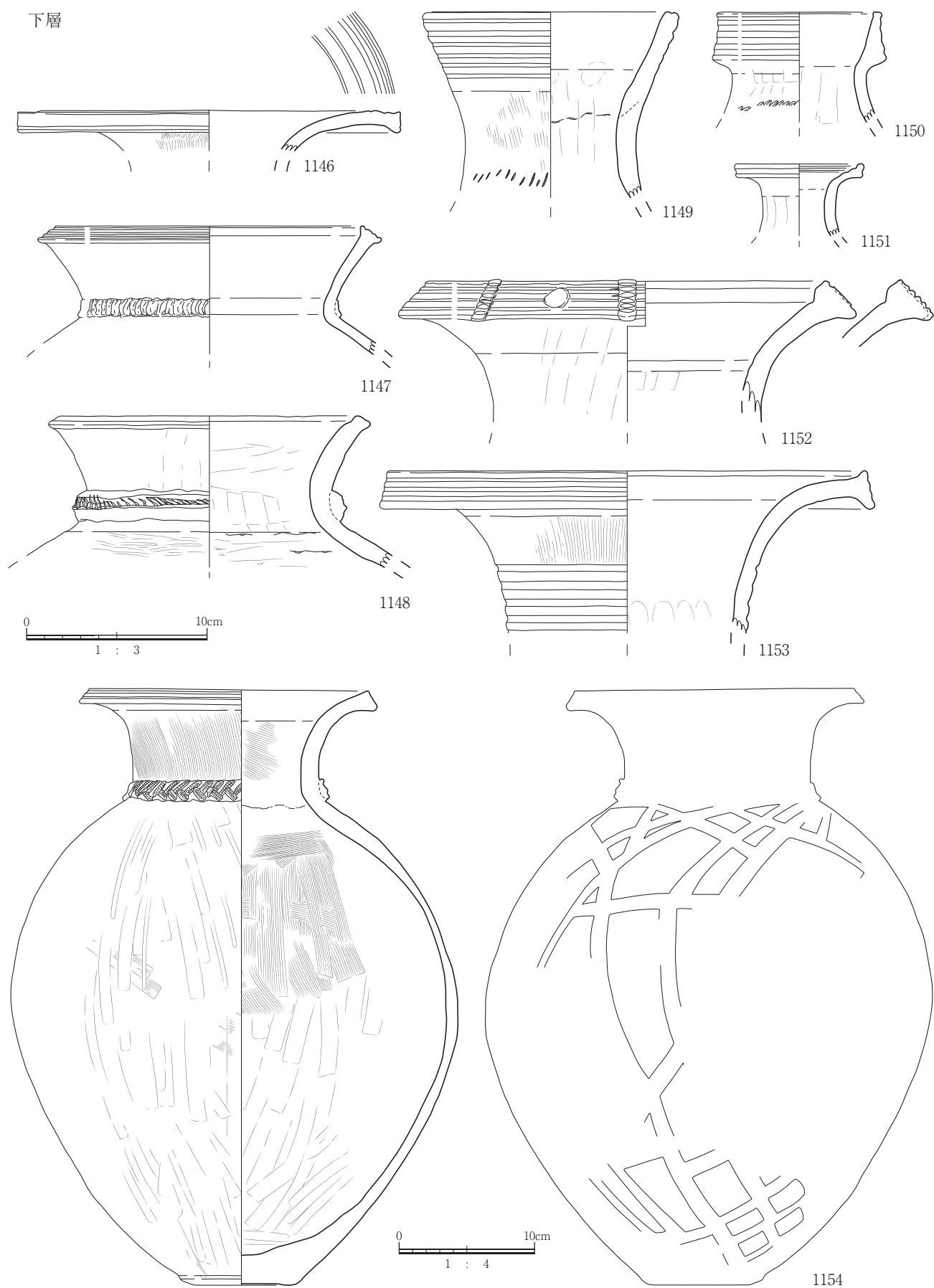


図357 SR16 出土遺物 23

強く屈曲する。1176・1177は長頸の広口壺で、いずれも完形に近い残存状況である。外面はハケとミガキが丁寧にされ、口縁部上面にはハケの後に放射状に近いミガキが認められる。頸部下位から頸胴部境にかけては、1176は4段の波状文、3段の櫛描文、および貼付突帯、1177は4段の波状文、4段の櫛描文が施されている。まったく同じではないが、波状文と櫛描文を交互に施文す

下層

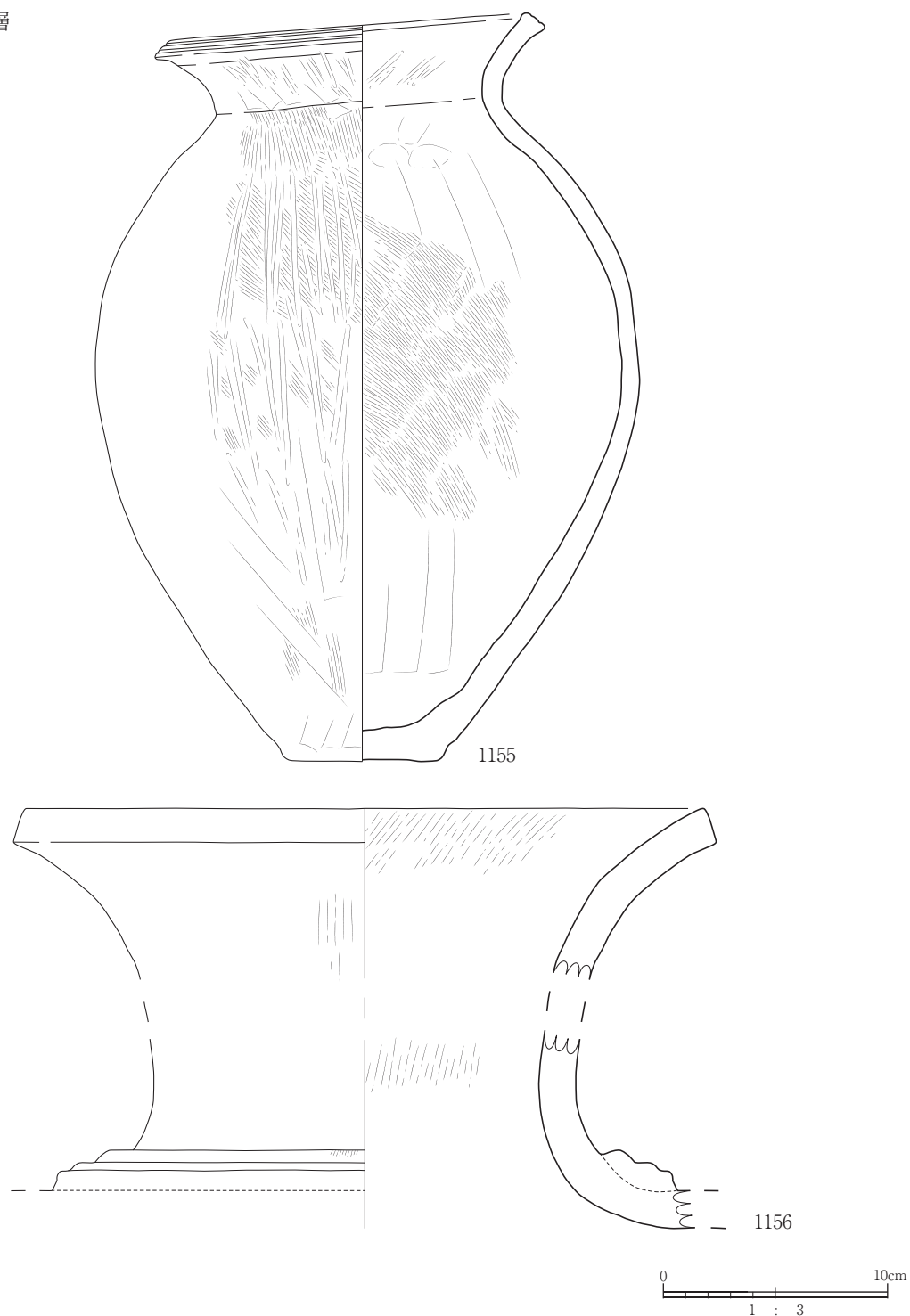


図358 SR16 出土遺物 24